

君は「メロス」のどこが好きか

— 広い感性と深い思考を —

教育学部長 片岡徳雄

最近の若い学生諸君のことで、少し気になることがある。新入生の君は大丈夫だろうか。少し聞いてくれるかな——。

ある時、ふと思いついて、受講生たちに太宰治の「走れメロス」を読ませ、「この中で君の好きな文章にアンダーラインを引き、理由があればそれを書け」と求めたことがある。約60人の学生達の70%の者が、「信じられているから、走るのだ」という文章を取り上げ、中にはわざわざ、「先生、なんといっても、ここでしよう。ここが一ばん大事でしょう」と、強迫まがいの注釈をつけている者もいる。「この短編の主題を示す文章を」と言われれば、なるほど、ここが正解になるだろう。しかし、私が求めているのは「君個人の好みはどこなの？」だ。学生一人一人の顔が違い性格が違う以上、もろといろいろなパレティーターがあってもよいではないか。

一般に、今の学生たちは、試験問題といえはなんでもかでも、「一つの正解」を求め、「多くの精確な知識」を求め、というパターンに飼い慣らされているのではないか。ましてこの場合、自然科学でも社会科学でもない。まさに各人の好みやフィーリングを自由に語ってよい、文学・芸術の領域ではないか。「一ばん大事」とか「一ばん正しい」とか「作者の言わんとすることは何か」など、聞いているのではない。正誤の評価基準など、はじめから私の念頭にはないのだ。

次は、つい最近のこと。私のある講義のテストにまつわる話。社会学や教育学に関するいくつかの用語や仮説の「説明」を求めた問題の他に、「この講義中にいろいろ用いたビデオの視聴をとおして、君が学んだことを記せ」という、

少し漠然とした問題を出しておいた。

君にちよつと内緒に言うておくが、この「君が学んだことを記せ」という問題は少し曲者で、これは要するに「何でも自由に書けば点になる」という出題者のサーヴィスなんだ。じっさいビデオの内容は教育問題を考えるナマの材料で、講義中でもそれをめぐっている討議してもらったものである。

にもかかわらず、多くの学生は、この「学んだこと」をきわめて狭く律儀に解し、そのビデオの映像に託された情報の内容と方向をおうむ返しにしかも手際よく、まとめて記述しているのである。

「自由奔放な」答えを求めた私は、これを読んでガックリし、あまりにも素直で要領のよい「情報の要約者・解説者」だけにお目にかかった寂しさを味わった。もちろん、情報を理解し整理し記憶することは大切である。しかし、ナマの現象に近い映像からは、乱反射する思考の多様性が生まれてこそ、深く「学んだ」ということになりはしないか……。

要するに私が心配するのは、最近の学生諸君には、感性——価値に気づく感覚——を見失い、自分の思考——自分なりの論理——が衰弱しているということだ。

君はこの点、大丈夫だろうか。書物や映像やその他様々な情報に接し、あるいは様々な社会現象に触れて、自分なりの感性と、自分なりに考えてみる習性を、君をはじめ今の青少年はもっているだろうか。

「人間の教育を考える」学部への入学にあたって、まずこのことをよく考えてほしいものである。